

第35回 龍頭が滝案内

絵でよみがえる、瀧神社と龍頭が滝の風景（その1：森為泰の歌の本から）

前回までは、『雲陽誌』を読みながら瀧神社を探しましたが、今回は、絵を使ってみようと思います。

まず、森為泰（もり・ためひろ）が書いた、『出雲紀行』という紀行文集に収められている、『石見国松川小林両家へ送る歌』という文章の中に、龍頭が滝の絵を見つけましたので、それを紹介します。この文章には、和歌（五七五七七の歌）のことが書かれているので、本題に入る前に、和歌と出雲地方について、少し触れておきたいと思います。

出雲地方は、和歌発祥の地とされています。『古事記』や『日本書紀』に、素戔鳴尊（スサノオノミコト）が櫛名田比売（クシナダヒメ）と結婚する際に、「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を」という歌を詠んだとされることから、そのようにいわれています。和歌発祥の地ということも一因でしょうか、古くから出雲地方では、和歌が盛んに詠まれていたようです。

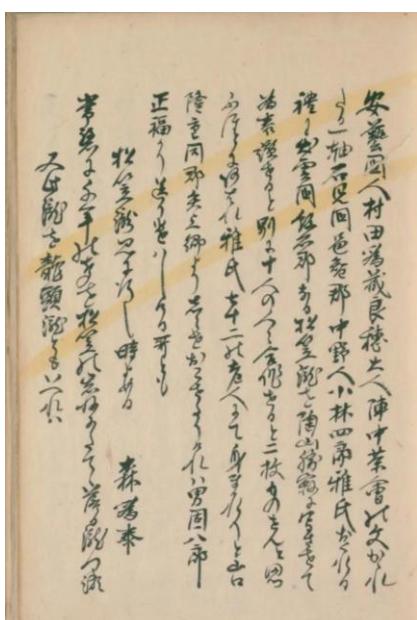
1700年（元禄年間）ごろに作られ、出雲大社に奉納された歌集『清地草』には、全国15か国の歌人473名が詠んだ、1,048首の和歌が納められていて、そのうち、出雲地方の歌人は、232名です。また、1840年（天保年間）ごろに作られた、『類題八雲集』という歌集には、340名ほどの出雲地方の歌人が詠んだ、1,320首の和歌が納められています。その歌人の内訳は、出雲大社に関わる人、松江藩士、出雲の国の神社関係者がほとんどですが、商人や医師も、数名入っています。掛合村神主の蔭山葆高という人の歌も、5首収められています。神職や武士による和歌の会が、出雲地方のあちこちで、催されていましたのしよう。

また、千家俊信（せんげ・としさね。1764～1831）、出雲大社の国造であった千家尊孫（せんげ・たかひこ。1796～1873）、そして、これから紹介する森為泰といった、優れた歌人も現れて、出雲地方の和歌を、隆盛に導きました。

森為泰という人ですが、1811（文化8）年生まれ。1875（明治8）年没。松江藩に仕える、弓・馬・剣・槍などに熟練した武士であっただけではなく、国学や八雲琴にも通じる、文化人でもありました。為泰は、和歌にも長じていて、松江藩の藩校である「修道館」で行われた、藩主松平定安臨席の歌会で、添削の大役を担ったりと、和歌の実力を兼ね備えた、第一級の歌人でした。

さて、『石見国松川小林両家へ送る歌』の内容です。時期は、記載されてはいませんが（明治初めの頃か？）、石見国邑智郡中野の小林四郎雅氏という人が、為泰あてに、絵を一軸送りました。掛け軸だったのでしょう。そのお礼に、

為泰は、陶山勝寂（すやま・しょうじやく）という画家に、龍頭が滝を写させます。出来上がったその絵に、贊（さん）を入れました。贊を入れるというのは、絵の余白に、その絵にちなんだ詩歌や文章を書くことです。また、この絵とは別に、18人の人々が（記載はありませんが、邑智郡の人だと思われます）、和歌を詠むというので、もう2枚の龍頭が滝の絵を作成しよう、と思っていました。（以下、次回に続く。）



『石見国松川小林両家へ送る歌』

『出雲紀行』18-19, 写. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2538209>
(参照 2025-11-21)